

# 桐生新町の社会構造について 化政期を中心に

横山伊徳

On the Social Structure of Kiryu-shimnachi : Focusing on the Kasei Period

はじめに

- ① 桐生新町の住民構成
  - ② 桐生新町における夫銭と人足
  - ③ 火消と町役人
- おわりに

## 【論文要旨】

近世在方町の研究の一つの到達点は、渡辺浩一「近世日本の都市と民衆」(吉川弘文館、一九九九年)にみることが出来る。同書は、住民結合という分析手法を積極的に提示した点にその特長がある。私は、「権力的に担保されていない集団」をも含み込んで、在方町の住民構成を論じるべきとの渡辺氏の立場に共感を覚えるものである。と同時に、同氏の方法には、70年代の人民闘争史研究が「住民を住民結合の成員としてではなく階層として把握した」ことに対する反省からであろう、「対立ではなく共同の契機を住民構成の中から見いだそう」という指向が色濃く見られる。しかし、一般的にみて、集団の共同性は、他者(構成員以外)に対する排除と自己の特権維持を共同性の本質としている、と考えるのも可能であろう。したがって、住民結合の共同性と排他性との「両義性」をこそ問題とすべきではなからうか？

本稿は、典型的な在方町と考えられてきた、上州桐生新町の住民構造を分析するものである。しかし、上記のような研究史上の問題意識の変遷の以前に書かれている。

したがって、共同組織たる町を主語とする研究ではない。町を構成する住民の中に、いわゆる阿側町の短冊状の「屋敷地」に自宅(兼店舗)と数軒の借家を構える「高持」と、その「高持」を家主として細業を営む借家人との関係を指定する(こうした理解は、玉井哲雄氏と吉田伸之氏の江戸分析に学んでいる)。本稿では、さまざまな社会事象(人別、廻状、詫び、清掃、祭礼など)を分析することにより、この「高持」と「借屋」の関係を、特定の人格的な依存関係と描いている。こうした人間関係を内包した「高持」たちが個別町(新町では丁目にあたる)に結集する核は、「火消」と呼ばれ、彼らは入札によって「高持」から選ばれる。「丁目」を代表して「火消」は町行政の一端を担い、やがては惣町に責任を持つ町役人になるなど、いわば顔役として機能するのである。桐生新町の住民結合のあり方は、共同性の根底に対立的要素を抱えていた。そうした両義性は、天保期から開港期に至る激しい経済変動をうけ「高持」―「借屋」関係が危機を迎える中で、社会の表面に現れてくるのである。